

童話 王女の猫の話

— カレル・チャペック —

東京女子高等師範學校教授 中野好夫 譯

四

アメリカの名高い探偵のシドニー・ホール君はある日この話をすっかり新聞で讀みました。そしてしばらくじつこ考へこんで居りましたが、やがて、よし一つ僕がやつてみよう、その魔法使ひを捕へるこゝが出来るかどうか、其決心致しました。そこでホール君は百萬長者に變装して、ポケットにはピストルを置いて、ヨーロッパへミ出發致しました。

ホール君は着くまその足でまづ警視總監に面會しました。警視總監は魔法使ひを捕へるためにこれまでいろいろやつてみた話を残らず長々話してくれました、そして一

番お終ひに、『まあそんな譯ですから、あの男を裁判にかけろこゝは絶対に不可能です。』と附加へました。

ホール君はニッコリ笑つて申しました。『僕は四十日以内にきつミ捕へてお目にかけます。』

『出来るもんですか。』總監は申しました。

『ちや梨を一皿賭してみませうか。』ホール君は申しました。さいふのはホール君は梨さいへば目が無いので、それに賭をするこゝも好きでありました。

『よろしい。』總監は申しました。『だが伺いたいものです、あなたがあなたは一體どうなさうさうさいふのです。』

『まづ第一にはですネ、』ホール君は申しました。『一つ世

界中を一周してこなくちやなりません、だがそれには大變なお金が必要なのですが。』

そこで總監はぎつさりお金をホール君に渡しました、そしてさも心得たやうに、『ハハア、あなたの計畫さいふのは分かりましたよ。だがこれは緊く祕密にしておかないといけませんな。なにしろ吾々が追跡してゐることを魔法使ひに悟られるとお仕舞ですからな。』

『そうじゃありませんよ。』探偵は申しました。『それごろか、明日になつたら早速有名なシドニー・ホールが四十日以内にはきつみ捕へてみせる緊い約束をしたさいふ記事を世界中の新聞に出してもらひたいのですネ。それはミにかくして私はこれで失禮します。』

またその足でホール君はある名高い旅行家のところへやつて参りました。この人は五十日でこの世界を一周りしたさいふので大變有名な人でありましたが、ホール君は申しました。『一つ賭をしようぢやありませんか、私は四十日で世界を一周してお目にかけます。』

『駄目、駄目。』旅行家は申しました。『ファクスさんは八

十日で一周したのですが、私は五十日でやりましたよ。これ以上早くしようなんて、ミても無駄ですよ。』

『よろしい、』ホール君は申しました。『では金貨一千枚を賭けませう。』

いよく賭をするこゝになりました。

その晩にはもうホール君は出發致しました。そして一週間目にエジプトから電報が参りました。『ツイセキチウホール』

また一週間するミ、今度は印度から第二の電報が届きました。『ゼンジセツキンシユビジョオジヨオイサイフミホール』

しばらくするミ印度からの手紙が届きましたが、それは誰れにも讀めない難しい暗號で書いてありました。

それからまた八日するミ一羽の傳書鳩が首に紙片をつけて日本の長崎から到着致しました。そして紙片には『イマ一イキホール』とありました。

その次はサンフランシスコからの速達便で、『カゼヒイタソノホカカワリナシナシノヨオイセヨホール』

出發してから丁度三十九日目にはオランダから電報が着きました。『アスバン七十五カヘルナシノヨオイセヨホール』

さていよく四十日目の夜の、七時十五分、列車が大きな音をたて、停車場に到着致しました。その瞬間ホール君はヒヨイミブラットフォームに跳び降りしましたが。その後からはあの魔法使ひが——むつつりした蒼白い顔をして伏目勝ちにトボく、隨いて来るではありませんか。探偵達はブラットフォームに揃つて待受けて居りましたが、思はずアツミ驚きの聲を擧げました。魔法使ひは繩一つかけられてるません。ホール君はみんなの方へ一寸手を擧げて申しました。『諸君、今夜クラブで待つてゐてくれ給へ。この男をこれから監獄へ連れ行かなくちやならないから。』そう言つてホール君はタクシーを呼び止めるに、そのまゝ魔法使ひを連れて乗りこみましたが、ふき何か忘れて居たことに気がついたやうに、車の中から大聲で呼びました。『それから諸君、梨の用意をしておいてくれ給へ。』

そこでその晩は探偵達がすつかり揃つて席に就いた真中

に、上等の梨の實が一皿ホール君を待つて居りました。

みんながすつかり待ち疲ふれて、もう今夜はないのではないかといふやうな話になつた時分に、不意にクラブの戸口が開いて、ひびくヨボくしたマツチ賣りの老人が入つて参りました。

『爺さん、探偵達は申しました。折角だが何にも要らないよ。』

するに爺さんは『へー、それは御氣の毒なことで。』と言つたかと思ふに。突然に身體中がブルく慄えだして、咳をするやら、唾を吐くやら、到頭おしまひにはひびく噎せかへつて。椅子の中へ俯伏してしまひました。

『オイ、オイ。』一人の探偵が申しました。『まさか死ぬんぢやあるまいネ。』

『イエ、イエ、ごう致しまして。』爺さんは苦しさに咳きこみながらやつと申しました。『俺しやもうたまらないんでがすよ。』言はれてみるに、成程爺さんは先刻から息のこまるほぎ笑ひ入つてゐるので、それがごうしても止まらないらしいのです。眼からは涙がボロく落ちる。聲はか

れる、二つの頬つぺたまで蒼くなるくらい笑ひ入つて、まるで唸るやうに申しました。『皆の衆、皆の衆、俺しやもうたまらないんでがすよ!!。』

『オイ、爺さん、探偵達は申しました、』さうしたさいふんだ。』

する爺さんはヨロ／＼立よつて、ノタ／＼卓子の傍へ来たと思ふに、皿の中から一番上等な梨を一つ取上げて、クル／＼皮をむいて、たつた一口にバクリ／＼食べてしまひました。それからやつ爺さんはつけ髻や、つけ鼻や、かつらの白髪や、青い老眼鏡をむしりこつてしまふに、その後から綺麗にカミソリをあてツツ／＼するホール君のニコ／＼顔がヌツ／＼現はれました。

『諸君、』ミホール君は頭をペコン／＼一つ下げて申しました。『腹を立てないでくれ給へ。僕はミにかぐ四十日間といふもの一切笑はなかつたんだからネー。』

『で君は一體何時あの魔法使ひを捕へたんだい。』探偵達は異口同音に乗り出しました。

『ナニ昨日さ。』ホール探偵は申しました。『だがネ、僕は

最初から奴を一杯食はせてやるつもりでネ、初終心の中ぢや笑つてたんだよ。』

『一體君はさうして捕へた』探偵達はせきこんで申しました。

『ウム、その話は大分長くなるが、』ホール君は申しました。『まあ、この梨を食べてからお話しよう。』

ホール君は梨を食べ終るに、こんな風に話しました。

『諸君、まあ聞き給へ。まづ第一に一番肝腎なことは、ほん／＼に探偵にならうと思ふ者は驢馬のやうな鈍馬ぢや駄目だネ。』と言ひながらホール君はまるで聴手の中に實際驢馬でも居るかのやうに四逆を見廻しました。

『それから、』探偵達は訊ねました。

『それからだつて?』ホール君はうなづきました。『それから、ハシコクなくちやいけない。第三には、また一つ梨の皮を剥きながら申しました。』頭を動かさなくちや駄目だ、諸君はさうして鼠を捕へるか知つてるかい。』

『チーズで捕へるさ。』探偵達は答へました。

『魚は？』

『ゴカイかミミズだよ。』

『ぢや魔法使ひは？』

『サア、そいつはわからない。』

『魔法使ひだつて。』ホール君は苦もなく申しました。『他のものと同じこゝろさ、弱味につけこむんだよ。たゞ何が彼奴の弱點だか、そいつを最初に知ることが肝腎だな。こゝろでサア、諸君は魔法使ひの弱點が何だか知つてゐるかい？』

『イヤ、知らない。』

『好奇心だよ。』ホール君は申しました。『魔法使ひこいふ奴は何でも出来る。だが恐ろしく好奇心が強いんだ、物好きなんだよ。こゝろでも一つ梨を御馳走にならう。』

また一つ食べ終るこゝろ、話を續けました。『君達は自分達が魔法使ひを追馳けてゐるつもりでゐたらう。こゝろがだ、初終追馳けられてゐたのは實は君達なんだよ。彼奴は初終君達の跡をつけてゐる、一時だつて君達から眼を放すこゝろはないんだ。恐ろしく好奇心が強い、だから君達が彼奴をやつつけようこゝろを捻つてゐる、そいつを彼奴はすつ

かりかぎつつけようこゝろいふんだ。だもんで、君達では彼奴の跡を追馳けてゐるつもりか知らないが、彼奴は初終反對に君達の跡を隨いて歩いてゐる。で僕はその好奇心を利用して計略を立てたんだ。』

『計略てのは？』探偵達はひそく意氣込んで參りました。

『そいつはこゝろだ。ナニあの世界一周こゝろいふのは全く遊び半分なんだよ。僕は長い間世界一周をしてみたかつた。』

が生憎こゝろも機會がない。こゝろが今度こゝろへ来てみて、ふこゝろ考へたんだ、魔法使ひのやつつきつこゝろ僕の跡を初終つけて廻るだらう、僕の計略をかぎつけようこゝろ思つてネ。それが彼奴の好奇心なのさ。エートそこで僕は考へた、よし一つ彼奴を御供にして世界を廻つて来てやらう。僕もいろんな見物が出来ると、しかも彼奴を初終監督してゐるやうなもんだ。つまり彼奴の方で僕から離れるこゝろないだからネ。なほ僕は彼奴の好奇心を一層焚きつけるために、四十日まで捕へてみせるなんて、あゝした賭もしてみたんだ。も一つ御馳走にならう。』

食べるのが終るこゝろまた續きははじめました。『梨ほご美味

しいものはないネ、君。ミこころで僕はピストルを一挺、旅費をいくらか持つて、服装はまあ商賣人さういふ恰好にして、出かけた譯だ。最初はイタリのゼノアへ行つた。あそこへ行つてみるミアルプスの山々がすつかり一目に見えるネ、イヤ、大した高さだな。頂上から石が落ちるミ、君、なにしろ落ちる道中が途方もなく長いので、下へ落着くまでにはすつかり苦だらけになつてしまふさういふんだ。ゼノアからは船でエヂプトへ行つてみようと思つた。

『ゼノアは美しい港町だよ、實に美しい、それで船なんぞはひみりりにドン／＼走るさういふんだ。例へば船だがネ、ゼノアの沖合百哩ばかりまで来るミ、機關かまに火を焚くこども、スクルーを廻すこども止めちまふんだ、帆も無論疊んでしまふ、それでも船の方で早くゼノアへ行きたい、早くゼノアへ行きたいつていふ譯なんだらう、さん／＼ひみりりに動いて行つてしまふさういふんだネ。』

『ミこころで僕の船はかつきり午後四時出帆さういふこどもで、僕は三時五十分大急ぎで港へ馳けつけた、ミこころが道で可愛い女の子が一人シク／＼泣いてるぢやないか。』

『コレ、コレ、何故泣いてるんだ、——僕はさう訊ねた。』
『するミ女の子はシク／＼泣きながら、——妾めたい、もう駄目なの——ミさう言ふんだ。』

『で僕は、駄目なんなら、駄目でないようにしなくちや駄目ぢやないか、つて言つてやつた。』

『するミ子供の言ふには、お母ちやんが何處かへ行つちまつたの、何處に居るんだか、妾知らないんだ——ミ云つて泣くぢやないか。』

『そうか、そいぢやなんでもない、僕はさう言つて、その子供の手を取つてさ、母親を探しに出かけたんだ。物の一時間もゼノア中を馳けすり廻つたかな、まあやつミ母親は見つかつた。ミこころで時間だ、時計を見るミ四時五十分。もう僕の船はミつくに出ちまつた筈だ。子供のおかげですつかり丸一日つてものを損しちまつた譯だ。すつかり面白くなくなつて、まあ仕方がない、港までやつて來た、ミこころがさうだ、僕の船が待つてるぢやないか。僕は勿論馳け上つた。船長は僕の顔を見るミ、ヨオ、お客様、御間に合ひましたネ、なんだか少し變なのですがネ、さうかし

て錨が海底にくつ着いてしまつて、丸一時間てもものごうしても上らなかつたんですよ。そうでもなくちや無論きつくに出帆してるところですとも。で僕は無論大欣喜さ。だがも一つ頂戴しよう。』

ホール君はまた食へ終るまゝ、いよう、こいつは美味い。

エート、そこで僕等は地中海へ乗り出した譯だ。綺麗だね、見渡すかぎり蒼海で、實際ごこからが海で、ごこからが空だか分かりやしない。でネ、船にも陸にも到るころ、ごこから海、ごこから空なんていふ貼紙がしてあるんだ、でないご分からなくなつちまふんだネ。船長の話ぢや、つい先達ても、ある船がさんだ間違を仕出來してネ、海へ乗り出す代りに、空へドン／＼登つて行つてしまつたさいふぢやないか。空にはなにしろ涯はてしがないさ、そのまゝ未だ歸つて來ないつてんだが、無論何處に居るんだか分らん。でまあ僕等は海を渡つて、エヂプトのアレキサンドリアに着いた。

『此處から僕は電報を打つた。それさいふのもつまり魔法使ひに僕が追跡してゐるぞさいふごこを思はせるためだ

けのこごさ。だが僕は彼奴なんぞに關つてやしない。たゞ何處へ行つても先生やつぱりついて來てるなご思つてゐた。鷗が船の周りを飛んでゐる時には、それからほるかの空を信天翁が羽搏いてゐるのが見える時には、先生僕の跡をつけてあの中に居るんだなご思つた。魚が海の中からじつご僕の方を見る時には、先生あの眼から僕を睨んでゐるんだなご、そう思つた。それから大洋うみを渡る燕の群が船の索に止つてゐる時なんぞは、僕はきつごその中で一番美しい奴、あの眞白なのがきつご彼奴に違ひないご思つてた。

『アレキサンドリアからはナイル河を上つてカイロへ行つた。大きな町だ。恐ろしく高いお寺の塔がなかつたら、方角も何も解らなくなつちまふだらう。お寺の塔は随分遠くからでも見へる、ごんな遠い田舎家でもそれで方角が解るんだ。』

『カイロからナイル河へ一度水浴びに行つた。なにしろ暑いんだからネ。僕は水着を着てピストルを持つただけで、服は全部岸に残しておいたんだ。ごこころが大きな鰐の奴が

ノソノソやつて来て衣服も何も、時計からお金まですっかり食べちまつた。僕は馳けつけるなり、ピストルをドンドンドンドンと、六發ばかり打放したんだが、まるで鋼鐵張りのやうに弾丸は皮に當つて弾き返るだけぢやないか。そして鰐の奴は僕を見てゲラゲラ笑つてゐる。エート、も一つ貰はう。』

梨を食べ終るに、ホール君は續きをはじめました。『君達は知つてるかい、鰐つて奴は子供のやうに泣いたり涙を流したり出来るんだ。つまりそれで人間を水の中に誘き寄せろんだな。赤ん坊が水に溺れかけてるに、人々はてつきりそう思つて救助に行く、そこで鰐の奴がガブリミやつて食つちまふ。ところがこの鰐はおそろしく年功を経た奴で、子供の泣聲どころぢやない、船乗りのやうに悪態もつけば、歌ひ手のやうに歌も歌ふ。人間同様に話も出来る、何でも同々教に御宗旨替へまでしてゐるこいふ話もあつた。』

『だが實は少々僕も閉口した。服を金をさられてはさうしたものかミネ。ところがふみ傍を見るに何處から来た

か、眞黒なアラビア人がヒョッコリ立つてゐて、鰐に話しかけるのだ。オイ、鰐の野郎、貴様はこの旦那の服を時計を呑んぢまつたらう。

『うん、食べたよ。ミ鰐はすましたものだ。』

『するミアラビア人は怖ろしい權幕で怒鳴つた、この馬鹿野郎!!、あの時計はゼンマイが捲いてないのを貴様知らないのか。動かない時計なんぞ呑んで馬鹿野郎、何になる。』

『鰐の奴も一寸ばかり考へて居たネ。そして言つた。モシ〜旦那、では私がネ、一寸口を開けますから、私のお腹へ手を突込んで下さいな。そして時計を引張り出して、ゼンマイを捲いたら、また元へ返していただきますがネ。』

『で僕は、ヨシ、来た、造作ないことだ、だが僕の手を噛んぢやいやだぜ。エート、そうだ、この棒片をお前の口中へ立て、置くにしよう、そうすれやその汚い口を塞ぐことが出来ないだらうからな、ミ言つてやつた。』

『するミ鰐の奴は、旦那、私はネ、生憎ですがそんな汚

い口なんぞ持つてやしませんぜ。だが旦那が別にさうしよ
うさいふんでなければ、その棒片を顎の間に立て、おくん
なさい、そして早くやつておくんなさいよ。

『で僕は無論そうすることに、奴の腹の中から時計
は勿論、服から靴、帽子までつかみ出した、そして言つて
やつた。お土産だよ、その棒片はそのまゝお前の口の中に
置いて置いてやるよ。サア鰐の奴は怒つたネ、さんざ僕に悪
口を吐きたいらしいのだが、生憎棒がつつかへて、口が塞
がらない。一度は僕を喰つちまはふとした。それから涙を
流して到頭僕に憐れみを乞ふらしいんだ、だがそれも出来
ない、僕はそこで悠々衣服でも着込んで、言つてやつた
よ。ヤイ手前の口を見る、知らないきや言つてやらうか、咀
だらけの、泥だらけの、バババババーだ。そして僕は口の
中へベツ！と唾を吐いてやつた。奴は口惜し涙をボロ／＼
こぼして居たよ。』

『その時僕はふき例の僕を救つてくれたアラビヤ人の方
を振り返つてみたんだが、その男はいつの間にか消えて失く
なつてゐた。ナイル河へ行つてみたまへ、今でもその鰐の

奴は大きな口を開いたまゝ泳いでゐるよ。

(つづく)

七〇

大公孫樹

幼稚園のなかで、季節のうつり變りをはつきりと知ら
せてゐるものに山の上の大いふがある。

公孫樹といへば、どこでも大かたは太木であるが、
こゝのはその中でも著しいもので、神代からそのまゝこ
こに樹つてゐるやうな、太い輪の空洞には數々の神話を
秘めてでもゐるやうな氣もして眺められる。

つい四五日前迄は、まだ緑が少しばかりのこつてゐた
のに、今日はもうすべて、眞黄いろだ。

裸木のときが、却つて葉にかくれたよりも趣深い木も
ある。このいてふも冬は又冬で、一本として空しからぬ
小枝の交叉が、太い幹の周圍をやさしくとりたまいたの
を、窓ごしに眺めたことも思ひ出される。もうちぎだ。

自分のものをほめるわけでは無いが、この大公孫樹が
また幼稚園としてながめるのに、最もいゝ場所にあるの
で、どうしても見るやうになつてしまふ。ついこども迄
も誘つて、殊に此頃は一應何の彼のと話しあふ。

古木といへども、春になれば柔らかな緑が魅みがへる
とは思ひながらも、この大公孫樹から冬を思はせられる
現^ま前の感傷は、抑へがたいことである。

(十一月十六日 よしこ)